



Title	手が頭脳になるとき
Author(s)	小山, 明
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 19-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67712
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第2回デザイン関連学会シンポジウム 発表概要

手が頭脳になるとき

小山 明／芸術工学会／神戸芸術工科大学

バウハウスが創立から100年が経ったいま、ふたたびバウハウスをとらえなおす時に思うことは、もしもバウハウスが現代に現れたならば、これからの14年間でいったいどのような教育をおこなうであろうかということである。このことを考えることは同時にバウハウスを再定義することになると思われる。

絵を描き言葉を使い始めた時から、記憶機能をはじめとして、人間は脳の機能を外在化させてきた。手は道具となり機械となった。その「手」の拡張の時代の最長不倒距離を残したのがバウハウスであったことは言うまでもない。パラメータをシンプル化し、モジュール化し、システム化するという道筋が特に後半のバウハウスにおいては著しく達成されていたといえることができる。

現在もしも「機械と人間との関係」の中にバウハウスを位置付けるならば、「モリス」「バウハウス」「1980年代の機械の環境化」そして「2045年の特異点」というパースペクティブのなかでとらえる視点がひとつは考えられるのではないだろうか。

2045年とはAIがAIを作り出し、人間と機械との関係が劇的に変化することが予想される年であるが、これがいったいつになるかということとはともかくとして、人間が機械をつくるのではなく「機械が機械をつくる」という構造転換が行われるという意味においては、我々が現在視野に入れておくべき事柄のひとつである。

このような「手が頭脳になるとき」は、その一部はすでに「機械の環境化」として80年代に始まっていると考えられ、ある部分では

すでに完了している可能性もある。シンポジウムではいくつかの例証をおこない、いつそれが変わったのか、そしてどのように変わったのかを考えてみたい。

未来に向けては我々はこのような「手が頭脳になるとき」を視野に教育を考えるべきであり、一方で我々の中に層をなして蓄積された近代以前の身体・近代の身体・近代以降の身体について考える必要がある。このどちらの視点が欠けても現代のデザイン教育は不可能である。

形は異なるがすべてのものがコンピュータとなった今日、すなわちテクノロジーの環境化が進み、機械が水や空気のように環境となった現在、プログラミングは人類の新しい「言語」であり、機械とやり取りすることのできる唯一の手段として存在し、デザイン教育の中に関連づけていくことは必要不可欠なことであるが、教育の核となるのは「考えること」である。手が頭脳となりつつあるとき、人間にとって手のもつ力、言語のもつ力をふたたびとらえなおさなくてはならない。

